

事例4

子供同士のトラブルから保護者同士の問題に 発展した。

【概要】 中学校第2学年の子供同士の金銭に関わるトラブルが、保護者同士の問題に発展し、一方の保護者から相手を説得するように学校が頼まれ困っている。

◇Aさんの母親からの相談◇

Aさんの母親から担任に「Bさんの父親が怖いので、言いたいことが言えずに困っている。先生から、Bさんの父親を説得してもらえないか。」という相談があった。

事情を聞くと、Bさんの父親から電話があり「うちの娘がお宅の子供にかなりの金銭を取られているらしい。確かめてその金額を返してもらいたい。」と言われたそうである。

Aさんの母親が子供に事情を聞くと「この前ジュースをおごってもらった。でも、自分も前にシールを買って分けてあげたからおあいこだよ。」と言ったので、Bさんの父親にそのまま伝えたが、Bさんの父親からは「ジュースだけで何万円もかかるのか。警察に訴えることも考えているぞ。」と言われてしまった。

Aさんの母親は「Bさんの父親に、警察への訴えを取り下げてもらうように、先生から頼んでももらえないか。」と担任に話した。

◇相談を受けた担任の対応◇

担任は、AさんとBさんは仲のよい友達だと捉えていたため、金銭のトラブルがあることは知らなかった。担任として双方から事情を聞いて、事実を確認することを伝えた。警察に訴えないようにという点は、直接Bさんの父親に頼んでみてはどうかと伝えたが、Bさんの父親は大きな声を出すので、怖くて言えないということだった。

◇Aさんの言い分◇

担任は生活指導主任に経緯を報告し、AさんとBさんに事情を聞いた。

Aさんによると、塾の行き帰りにBさんと一緒になることが多く、途中にある文房具店でシールを買う度にBさんに分けてあげた。その後、Bさんがお返しとして、これまでに5回位ジュースやお菓子を買ってくれたという。

◇Bさんの言い分◇

Bさんによると、Aさんにいつもシール代を払ってもらっているので、ジュースやお菓子を買ってあげた。回数はよく分からない。ためていた小遣いがなくなったので、母親に小遣いを増やしてもらうように頼んだら、父親から何に使ったのかと怒られてしまった。これまでに使った小遣いは2万円位だった。Aさんのほかにもジュースやお菓子をおごった人は何人かいるし、シールやメモ帳などを友達に買ってあげたこともあった。

学校が聴き取った範囲では、BさんはAさん以外にも飲食物をおごったり、自分でも使ったりしたようであり、小遣い2万円のすべてをAさんに使ったのではなさそうである。担任は、Aさんの母親にはAさんとBさんの言い分を伝え、再度、Bさんの父親に率直に話してはどうかと促した。

◇Bさんの父親の反応◇

その翌日、Aさんの母親からまた学級担任に連絡があった。Bさんの父親に話をしたところ「なぜ学校に話したのか。小遣いの使い方は家庭同士の問題だろう。学校を巻き込むな。しかも、他の子にもおごったということは、うちの子が私に嘘をついているということか。そんなことはない。もう我慢できないのでこれから警察に行く。」と言われたそうだ。

◇警察に同行する必要があるか◇

Aさんの母親は「なんとか被害届を出すのを止めてもらいたいのので、今から一緒に警察に行ってもらえないでしょうか。」と言ってきた。学級担任は生活指導主任と相談し、今回はBさんの父親がどのような話を警察にするか、また警察がどういう判断をするか分からないので、待った方がよいと考えた。Aさんの母親には、「心配かもしれないが、Bさんから何かあったらまた連絡をしてほしい。」と伝えた。

◆被害届が出されることを恐れない◆

Aさんの母親は、Bさんの父親への怖さと同時に、警察に被害届を出されることを恐れているようです。確かに被害届の提出により、犯罪者扱いされるのではないかと不安はよく分かります。ただ、警察は被害届を出された場合、中立的立場で事情を聴きながら事実関係を明らかにしていきます。今回は、子供同士の間でおごった、おごられたという話になっていますから、確認することが難しいかもしれません。いずれにせよ、警察が介入することで不安と緊張があるのは分かりますが、ここは事実をはっきりさせようと気持ちを切り替えて臨んだ方がいいと思います。警察では中立的立場から助言されるはずですが、したがってBさんの父親が警察に行くことを恐れる必要はないと思います。

担任はAさんの母親から「先生も一緒に警察に行ってくれ。」と頼まれています。それは丁寧に断った方がいいでしょう。その依頼に応じた場合、Bさんから見ると教員がAさんの味方をしていると誤解が生じる可能性があります。警察との連携の窓口である生活指導主任や管理職から警察の少年係に連絡を取り、概要を説明しながら「このような保護者が行くのでよろしくお願いします。」と伝えておくことで十分だと思います。

◆学校が関わるべき取組を見極める◆

このケースは、学校に対する保護者の不信感を解消すれば済むという問題ではなく、Bさんに対してお金絡みの問題を将来起こすことがないように、丁寧に生活指導をする必要があると思います。

AさんとBさんの子供同士のトラブルですが、実はBさん自身が抱えている問題があるのではないのでしょうか。恐らく、Bさん自身の対人関係があまりうまくいってないのだろうと考えられます。Bさんは好きとか嫌いなどの感情的なものよりも、まずお金や物を通じて人との関係を作ろうとしているところがあります。そのために日常生活でお金が必要になり、このようなトラブルに発展してしまったのではないのでしょうか。

◆子供の将来を見据えて丁寧に指導する◆

Bさんの父親にすれば、親の責任でこうなったとは受け止めたくないという気持ちが強いと考えられます。そのため友達にそそのかされてお金を使っていたのだ、というようにうまく合理化して、自分の問題になかなか目を向けようとしなないのかもしれませんが。

Bさんの父親に、Bさん親子の問題だと面と向かって話すと抵抗があると思いますので、まずはBさんとの信頼関係を作ることから始めます。少し時間をかけて丁寧に対応していくうちに、様々な情報が集まってくると思います。思わずぼろぼろと、家の中での生活ぶりやお金の話等が出てくるかもしれません。この事例の場合は、双方から事情を聴いて金額のすり合わせをやると、つじつまの合わないことが出てきたり、他にも関係したC、D、Eなどとの関係が出てきたりして、問題が拡大してしまう可能性もあるので避けた方がいいでしょう。まずは、Bさんに焦点を当てた対応が必要です。

◆保護者の依存的な言動については、気持ちに共感しつつ見守る◆

Aさんの母親は、「自分は無力で何もできない。」と母親としての自信を失い、諦めているように見えます。そして一方で「担任の先生なら何かできるはず。だから担任にどうにか働きかけてコントロールすれば、事態が思うとおりになるのではないか。」と考えているようにも見えます。しかし実際には、母親と担任にはそれぞれの力や役割があり、できないことや限界もあります。その違いを理解して協力し合っていくことが大切です。

ですから学校は、そのような母親に対して母親が担うべき役割や課題を奪うことは避けるべきです。これはさらなる自信喪失につながる場合があります。つまり、支える、見守るに留めて、母親の気持ちに共感はしても、学校は動かないように心掛けるのです。学校がすることではないと断りながらも、母親を突き放さずに訴えに耳を傾け、母親が自ら決断し行動していく姿を応援していくことが求められます。

また、学校をコントロールすることができないと同様、Bさんの父親をコントロールすることもできないという事実をAさんの母親に受け入れてもらうのです。被害届を提出されても、「驚かなくてもよい。」「自分の力が及ばなかったと落胆しなくてもよい。」「でん、と構えてよい。」と伝えるべきです。

◆脅すような口調への対し方を知る◆

もし学校がBさんの父親に対応する必要が出てきた場合に、最も大事なのは子供であり、「Bさんのためを思って」という姿勢でつながることがポイントになります。

怖い口調には毅然として対応する方法もあります。「嘘をついているというのか。」に対しては、「そういうことはありません。」ときっぱりと言い返すことが必要なこともあるでしょう。しかし逆に、「そのような口調でおっしゃられては怖くて何も言えなくなります。」とこちらの気持ちを率直に伝えると、トーンが下がる場合もあります。

大声を出したり脅すような口調で話したりする方の中には、「相手が自分より強いから怖い。」と感じているからこそ、「負けてたまるか。」と自分を奮い立たせ、相手を怖がらせるためにしていることもあるからです。

◆一番の被害者は誰かを見抜く◆

この事例での一番の被害者は、Bさんかもしれません。父親はBさんに対しても怖い口調で問いただしている可能性があります。そのためBさんはついAさんの名前を出してしまったのかもしれません。

まずは、父親のBさんへの対応が改善されるアプローチを考えることが、最も緊急なことかもしれません。スクールカウンセラー、養護教諭等とチーム体制を組み、「人間は嘘をつくこともあります。聞き間違い、言い間違いもあります。大人も子供も、教員も、私も…。」などと伝えたりすることを考えます。「怖い相手にはつい、その場を収めるために嘘をついたり、言い間違ったりしてしまうことだってある。」ということ、Bさんの父親に理解してもらえれば、父親のBさんへの対応が変わっていくと思われれます。